新刊紹介

岩本泰波著
『ユダと提婆達多』
――救いなき人間の救い――

最近、岩本泰波先生の『ユダと提婆達多―救いなき人間の救い―』という書物が出版されている。内容は、㈠、ユダの〝縊死〟と提婆の〝生身堕獄〟、㈡、ユダの〝後悔〟と提婆の〝悔恨〟、㈢、〝提婆の堕獄〟と〝ユダの審判〟、㈣、救いなき人間の救い、という構成によって展開されている。

本書に、私が注目するのは、以前にカール・バルトの著、『イスカリオテのユダ』を読んだときの素朴なひとつの関心からである。

よく知られているように、ユダの物語は銀貨三十枚を身代金として受けとり、師であるイエスを敵の手に引き渡してしまう背信、裏切りであると同時に、そのことが十字架の受難、キリスト教信仰の柱となるのである。その点について、私は長く十二使徒のひとりユダという一人物の行為としてのみ了解していたのであるが、『イスカリオテのユダ』を読んでいたとき、ひとつのことを教えられた。

それは「マタイ伝」をはじめどの福音書も、最後の晩餐の席にユダを列し、そこでイエスはみずから十二使徒の足を洗うのである。

「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」（ヨハネ」一三・八）

と。その箇所について、バルトは、

「足とは、全体きよい者といえども持っている、きよくない部分である。そしてイスカリオテのユダは実に、この全体きよい者の持つきよくない部分、使徒のきよくない足を代表しているのである。わたしたちはすでにこの段階で注目しなければならぬが、ユダは彼ら全体を代表しているのである。」

と了解している。ユダの背信が十二使徒を離れ、また人間存在の事実性を超えた特別なこととしてあるのではなく、教えに生きんとする人間存在そのものにユダ性が確かめられている。ユダは遠い過去の一人物ではなく、イエス・キリストの教え、さらにいい換えれば、教法に生きんとするそこに生起してくる背信、裏切りという人間存在の罪性であることが知らされる。

いま、その問題をひとつの焦点として、イエスの使徒ユダと釈尊を殺害しようとした提婆の反逆、背信の事実を聖書と仏教経典に確かめ、対比によりつつ、人間とは何か、人間である存在の罪とは何かが論究されているのが本書である。

論点は、ユダの自己審判（自殺）の〝縊死〟と提婆の頭下足上の生身〝堕獄〟―。

「からだが真二つに裂れ、はらわたがみな流れ出してしまった」（「使徒行伝」一・一八）という、ユダの最期の縊死、そのことと「具に三無間業を造りければ、久しく当に大捺落迦に住在して無隙の苦を受くべけん」（『破僧事』）という、提婆の堕獄が信仰的実存においてどういう一点にかかわるかという大切な事柄への省察にある。その二極の関係については、本書の詳細な論究を読んでいただく他はない。

いま、身近の例として一・二の点のみを紹介する。よく知られた『歎異抄』の「いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」という親鸞の落在の表白と、提婆の生身堕獄の恐怖である。そこには「「これから」落ちてゆかねばならぬ「対境」……「地獄」を、他人の住居覗き」として対面する境位と、地獄「一定」と受

けとめた親鸞の仏道了解が「逆謗闡提」を軸として展開されている。

また、阿闍世と提婆の関係を通しつつ、親鸞が提婆達多尊者として仰いだ心境を、「ひとは自らの面を見ることができぬように自らの「悪」を知ることはできない。自らとらえ得たと自負する自らの悪は悉く観念の映像にすぎないのである。それは悪とはつねに人間において「自我」への没入であり、自我の誇りを維持し続けんとする焦慮に根ざすものであるからである。自らの存立を拒否せんと迫り来る他者の行態を媒体としてのみつねにひとは「悪」の実態をとらえようとする。それゆえに「悪」はつねにわれわれにとって「他に属する悪逆の相貌」としてしか、実存しないのである。それゆえにこそ、この度し難い事実をまともに逆照する「提婆」なくしては、ひとは永劫に「自ら」に遭遇することはできない。それゆえに提婆を「尊者」と仰ぐときにのみ、つねには批判の対象としかならない悪が親鸞においてはさながらにあらわとなり、限りなく自らの内奥に消化しつつ念仏と成る。かくて提婆が「尊者」として讃仰されねばならぬ事由は親鸞にとって限りもなく深いのである。」

と了解されている。

本書は、全体に亙って書名が示しているように、キリスト教のユダと仏教の提婆の対比を論点としつつ、仏教とキリスト教の信仰、思想の同一点と相違点が尋求されている。主著『キリスト教と仏教の対比』(創元社)を背景とした筆者の長い思索を通しつつ、興味深いユダと提婆の人物に視点を絞った、キリスト教に照らして仏教を、仏教に照らしてキリスト教を逆対応的に、ひとつの確かめと学びの示唆をいただく書物である。

(神戸和麿)

(レグルス文庫・二四五頁・第三文明社・一九八三年十二月十日・六八〇円)

浜千代清・渡辺貞麿編『日本文学と仏教思想』

かつて「仏教文学とは何か」と題された論文集が刊行され、さまざまの視点から、文学と仏教のかかわりについて議論が重ねられた。このことからもわかるとおり、日本文学の研究において「文学と仏教」という問題は、常に大きくかつ重要なテーマとして存在する。

本書は『日本文学と仏教思想』の書名が示すとおり、これに正面からとりくんだものといえよう。ここでは「〝仏教は、はたして文学たりうるか〟という問題を、具体的な文学作品・作家を対象として検証する」(序章)という方法によって、この問題を達成しようとしている。以下、そのもくじによって内容を紹介する。

第一章　因果の具現—『日本霊異記』の場合

第二章　『法華経』と国文学—原基としての説話を中心に

第三章　欣求浄土—仏教説話を軸にして

第四章　末法到来—武者の世・『平家物語』

第五章　自己を二つに裂くもの